

文部科学大臣賞

母の笑顔と朝顔と

兵庫県 小野市立旭丘中学校 三学年

廣瀬 佑宜

今年も庭先で朝顔が咲いた。母が好きな花だ。育てやすいし、上へ上へとのびるツル。夏の朝、蟬の鳴き声が聞こえ出し、『今日も一日、暑苦しいんだろぅなあ』という鬱陶しい気持ちとは裏腹に、朝露をうけて凜と咲く姿は、心にさわやかな風を届けてくれる。僕はビー玉のような滴を湛えた朝顔を見ながらアイスクャンデーを頬張った。朝顔に水をやりながら母が呆れ顔で言う。

「また、朝っぱらからアイス食べて！お腹壊すよ！」

「大丈夫だよ。コレくらい。」

「健康なときには、健康の有難みに気付かないもんよ。」

またいつもの母の口癖が始まった。

母は三年前、卵巣摘出手術を受けた。入院し、退院してからも長い間、仕事に行けなかった。

「暫く家でのんびりするわね。」

笑顔の母とは対照的に、僕は不安で堪らなかった。

僕の家は母子家庭で、母の収入だけで成り立っている。

『母がこのまま仕事に行けなくなってしまったら僕たちはどうなってしまおうだろう。』

路頭に迷うのは目に見えている。

『もしかしたら、このまま母が死んでしまうかもしれない。』

そう思うと胸が張り裂けそうになった。僕は、本当に情けない顔になっていたのだと思う。

「そんな顔しなくても大丈夫よ。お母さんね、仕事を始めた頃からずっと“生命保険”に加入してるから。手術代も入院費も、こうやって会社を休んでも、その分の生活費をカバー出来るの。有難いわよね。」

母は手術痕をさすりながら笑って言った。この頃からだ。

「健康って普段、まったく気に留めないけれど、病気になったときに改めて健康の有難さを知るのよ。」

と、母がやたらに言い出したのは……。

健康なときは、その有難さに気付かない。まったくその通りだ。病気や事故というのは何も、なりたくてなるものじゃないし、起きてほしくて起こるものじゃない。偶然に偶然が重なって不幸にもそうになってしまうものなのだ。誰だって、

第54回中学生作文コンクール

いつも幸せでありたいし、健康でいたい。当たり前前の感情なのだ。けど、もし不運にも病気や事故に遭った場合、少しでも金銭的に安心したいと思うのが、人の思いなのかもしれない。家族がいればなおさら、そう思うのではないだろうか。そのときに、少しでも家計への負担を減らすために相互扶助という形で生命保険は存在し、成り立っている。健康なときには、健康の有難みに気付いていなくても、これから起こりうる不測の事態に対応するために生命保険に加入することは大切なことなのだ。

朝顔の花言葉は「固い絆・愛情」だと聞いたことがある。母が朝顔に水をやるように僕は母から沢山の愛情をもらっている。そしてその水は、母からだけ注がれているのではない。周りの人たちからも沢山、僕に注がれているのだ。愛情という名のシャワーを、周りの人たちから沢山浴びて、僕はぐんぐんと成長する。朝顔のツルのように……。

「まだ、アイス食べてるの？お腹冷やささないでよ。」

朝顔に水をやり終えた母が笑いながら部屋に入ってきた。僕は、最後の一口を慌てて頬張った。

太陽の光をいっぱい浴びて、キラキラ輝いている朝顔が、僕を見ながら笑った。